

討論

【越】 それでは討論に入りたいと思います。

【竹内】 鎌倉女子大学の竹内です。ご発表ありがとうございました。死生学の新しい特質とその背景ということに関して伺いたいと思います。二〇〇八年二月に北京でこの「東アジアの死生学へ」の会議の第一回目をおこなったとき、北京の場合は、十年以上にわたる社会主義革命、文化大革命の中で、死生にかかわるさまざまな習慣や文化、宗教が失われたということもあって、死亡哲学という学問分野がさかんになってきているというのをうかがいました。また、日本の場合は、戦後、経済成長や効率等に重点を置く中で、死を前にしたときのよりどころを失ってきたという反省から、死生学が求められてきました。

いまのご発表をうかがいますと、台湾の場合、北京や日本のように死生学がこれだけさかんになってきた背景が直接あったように思えませんし、死に関する宗教や文化がひとつの生活の中に残っているという印象を、前回二〇〇九年に台北で会議を開いたときよりもより強く持ったのですが、にもかかわらず、新しい人を亡くしたり、大災害が起こったとき、台湾のひとつとはなぜ従来の宗教・文化・慣習でなく、新しい死生学、死亡哲学へと意識を向けるのでしょうか。なぜこうした流れが台湾にあらわれてきたのか、その背景をお教えいただければと思います。

【林耀盛】 ありがとうございます。

臨床心理学の角度から申しあげますと、いま台湾では、臨終に対するケア、ターミナルケアというものがあ
ります。一九八〇年以降、台湾の医療界はクオリティを重視する段階に入ってきました。それまでも生の質と
いうことは言われていたのですが、その頃から、死の質というものが考えられるようになってまいりました。
もうひとつは、一九九九年九月二十一日の大地震というものが、とても大きな鍵になっております。この大
地震の後、台湾では心理士の資格・免許制度が設けられました。心理的後遺症、PTSDなどに関する研究が
さかんになってきたこともあり、台湾で多くの人が死生の問題に触れる機会が出てきたわけです。いまは時間
の関係もありますので詳しくお話しできませんが、このことに関しては、総合討論のときにもう少し肉付けを
できるかもしれません。

【越】 時間の関係で次のご発表に進ませていただきます。総合討論の時間がありますので、その際にまた少
しお話しできればと思います。林耀盛先生ありがとうございました。（拍手）

それでは、二本目のご発表を楊濟襄先生にお願いしたいと思います。楊先生は中山大学の中文系の先生で、
もともと中国古代思想の専門家なのですが、同時にまた、現代の死生に関する儀礼の研究者でもあり、多くの
フィールドワークもしていらつしやいます。生命儀礼についての楊先生の授業は、中山大学のなかでもっと
も人気のある授業のひとつです。これまでのご発表者はみな男性でしたので多少堅い感じでしたので、女性研
究者のご発表が楽しみです。それでは、楊先生お願いします。

【楊濟襄（台湾国立中山大学中文系準教授）】 みなさまこんにちは。このような場で私の論考を発表することができて、
大変光栄に思っております。